



Title	<研究活動報告>ニーマイヤー教授講演要旨
Author(s)	ニーマイヤー, ゲアハート
Citation	スラヴ研究, 15, 170-175
Issue Date	1971
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5012
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000112936.pdf



[Instructions for use](#)

ニーマイヤー教授の講演要旨

——「いわゆる『未来の世代の幸福』などというものが、だれに分るだろう」(A.ソルジュニーツィン『ガン病棟』)——

*

* *

1970年7月10日、11日の両日、米国ノートルダム大学ニーマイヤー教授が北大スラブ研究施設を訪問され、おりから開催中の同施設研究員会議で講演されると共に(7/10)、研究員の報告および討論にも熱心に参加された(7/11)。以下、同教授の経歴ならびに講演主旨を簡単に紹介する。

*

* *

ゲアハート・ニーマイヤー(Gerhart Niemeyer)教授は、ドイツ生れ(1907)、亡命し(33)、米国に帰化(43)。ケンブリッジ、ミュンヘン、キール各大学に学び、国際法にかんする論文でキール大学から法学博士号取得(32)。マドリッド大(33~36)、プリンストン大(37~50)その他で教鞭をとった。米国国務省プランニング・アドヴァイザー(50~53)、外交問題研究会調査員(53~55)を経て、現在ノートルダム大学政治学担当教授。その間、イエール大(42, 46, 54~5)、コロンビア大(52)の客員教授、ミュンヘン大フルブライト奨学資金教授をも歴任した。主な著書として、*Law without Force* (1941); *An Inquiry into Soviet Mentality* (56); *Facts on Communism*. vol. 1; *The Communist Ideology* (59); *Handbook on Communism* (58); *Outline of Communism* (66); *Communism in Coalition Governments* (63)があり、最後のものには邦訳(原子林二郎訳『共産連立政権戦術』、東京・時事通信社、昭43)がある。

*

* *

講演題目としては、「レーニンと社会の全面的批判」が前以って聴講者側の希望によって選ばれていた。教授は、約6年前に執筆した“Lenin and the total critique of society”(The Review of Politics, October, 1964, pp. 473-504)を基にしつつ、さらにその後の研究の成果を補足追加する形で講演をおこなった。予め聴講者全員に上記論文コピーが配布されていたため、教授による報告よりもむしろ参加者全員による質疑応答ならびに討論に多くの時間が割かれた。以下は、上記報告全体にわたる忠実、客観的なレジюмеでなく、むしろとくに筆者個人の興味をひいた二、三の点にかんするかなり主観的で独断的でさえある紹介である。

周知のように、マルクスは、過去および現在の矛盾・搾取・貧困に満ちた(とくに資本主義)社会と革命が成功した後に到来する未来(社会主義)社会との二つの世界を明暗きわめて対蹠的に提示した。戦略・戦術論は別にしてこと歴史—世界観にかんするかぎりマルクスの命題をそのまま決定的な前提として受け入れたレーニンは、当然この現状にたいする仮借なき断罪および未来にたいする限りなき讚美というマルクスの黑白二分法をもそ

《研究活動報告》

っくり受け継いだ。ところで、ここで問題は、この二つの対照的な社会の、マルクスやレーニンにおける論理的因果関係いかんである。つまり、(1) 既存社会の悪ゆえにその克服態としての未来社会が志向されるのか、それとも全く逆に(2) 未来社会の善ゆえにその尺度に照らして現存社会が糺弾非難されるのか。むろん、相互因果関係にあると説明し、さることも可能であろう。だが、それではマルクスないしレーニンのもつ必然性の論理を全くミスしてしまうことになる。まず、筆者個人などは長年マルクス、レーニンを(1)の論理で読んでいた。即ち、マルクス、レーニンは、現存社会の悲惨な状態にまず着目しそれら諸悪の根源の一挙暴力的な廃絶としての革命を志向しいわばその結果として理想社会が招来されることを説いているのだと。わかりやすく図示すれば、現存社会の矛盾→(革命)→未来理想社会がマルクスの発想の順序なのである。つまりコトの起りもアクセントもともに前者(の社会)にあって、後者(の社会)にはないのだと。そして、実際のところ、マルクスによる資本主義社会の矛盾にかんする分析は詳細・精緻をきわめているが、他方未来社会の青写真のほうはといえば彼が克服した筈の空想的社会主義者たちのそれらを焼直した程度で質的量的にも誠に貧弱なものといってよい。ところが、ニーマイヤー教授がレーニン主義の論理として理解されるのは、逆に(2)の思考法のようなのである。即ち、レーニンにあっては、まず最初に未来社会なる理想像が設定され、その尺度に照らして現存社会の矛盾が摘発・糺弾され、変革が必至のものとしてジャスティファイされる。つまり、現存社会の破壊←(革命)←理想社会のヴィジョンという矢印こそがレーニン主義の真髓と説かれるのである。ここで、その当否を詳細に検討する余裕も能力も現在の筆者にはないが、きわめて刺戟的かつ示唆に富む見解であると思われる。

つぎに、ニーマイヤー教授のレーニン主義理解の仕方において特徴的な点は、レーニンによる既存社会の拒否の仕方が「全面的」であると捉えられる点である(教授の演題参照)。つまり、教授によれば、未来社会を完全に善なるものとしてこれに全幅の信頼と承認を与えるのと丁度うらはらに、レーニンは、過去および現在の社会を完全に悪として捉えこれを全面的に峻拒する。全面否定であるからして、たんに既存社会のある特定の原則、制度、慣行等の否定ではなくして(—それでは、単なる「部分的」否定ということになる。—)、社会という「家屋の柱という柱を凡て根こそぎ倒す」より直截に言えば全体制あるいは体制そのものを否定することを目指している。故に、なにか具体的な成果や業績があがったからといって、それに安易に満足して革命を即座に停止させてならないこと無論である。かくして空間的にドラスチックな革命は、時間的にも止まることを知らぬ半永久的な展開を遂げることになる。

このような革命の無窮運動的な本質の当然の結果として、ニーマイヤー教授は、さらにレーニンの「移行期」なる概念の輪郭と適応範囲がぼやかされ、永久・無限の性格を帯びるに至る傾向をも指摘された。もともとマルクスにあっては、移行期とは、資本主義の崩壊後社会主義がそれに代置しようとする時にプロレタリア独裁の形で出現する期間を指していた。しかるに、ニーマイヤー教授によれば、レーニンは、このプロレタリア独裁なる移行期をその本来の時期から前後に移動させたというのである。つまり、レーニンは、まず、プロレタリア独裁を一段階繰上げ、封建社会の崩壊後ブルジョワ社会がそれに代置し

ようとする時に設定した。これは、教授によって説いてもらうまでもなく、先進西欧諸国と異なりロシアにおいてはブルジョワジーが脆弱なうえに歴史の経験に学び早熟的反動化を遂げブルジョワ革命の主な担い手たりえなくなっている特殊事情にたいするレーニンの創造的レスポンスであった。だが、教授によれば、レーニンは、これに満足せず、さらにプロレタリアート独裁がブルジョワ社会以前の段階にさえ適用可能なことを暗示しているというのである。つまり、マルクス主義の古典的分類によれば、人類の歴史はいうまでもなく原始、奴隷制、封建、ブルジョア、社会主義の各社会に区分され、プロレタリア支配の移行期は本来このうち最後の二つの段階間の時期なのであるが、レーニンはこれら全ての段階に移行期の原理と性格を拡大したと説かれるのである。その当否はさておき、つぎに、教授が、同様に本来の段階以降の時期にもレーニンが移行期概念を膨脹させたと言われるのは、ソ連邦の現実の歴史に徴して正鵠を射ているといわねばならない。けだし、ソ連において、移行期なる概念が、「資本主義から社会主義建設への移行期」、「社会主義建設から社会主義への移行期」、「社会主義から共産主義建設への移行期」、さらに「共産主義の第一段階」や「成熟せる共産主義」への移行期、等々という風に、無限の増殖的趨勢を示していることは紛れもない事実だからである。その結果、「移行期」から言葉本来の一時的過渡的な性格が喪われ、そのかわりに恒常的・半永久的な性格が附着されるに至っている。

さて、以上一貫してみられた、未来社会の完全な理想化に基づく現実社会の完膚なき糺弾・否認というレーニン主義の基本的な問題設定の仕方自体ならびにそこから半ば必然的に導きだされてくる諸命題にたいしては、とうぜん種々の視点からする批判が可能であろう。が、ここでは、紙幅の制限と本来の主旨にもとづき、ニーマイヤー教授自身による批判的見解の紹介を最後に行うことにする。それは全く余談のごとくさりげなく洩らされたが筆者の胸にはなによりもまして鋭くつきささった、教授のソルジェニーツィン著『イワン・デニーソヴィチの一日』(1962)にたいする読後感である。このたびノーベル文学賞にも指名された作家のこの小説は、改めていうまでもなく、矯正労働収容所の悲惨な極限状態をえぐることによってスターリン体制のもつ暗黒面を痛烈に批判した書として一般に受けとられている。この小説をこのように理解することは全く間違いとはいえないし、またじじつ、フルンチョフ首相が出版許可を与えた背後の動機もたしかにこのようなものだったろう。しかしながら、このように文学的評価をはなれ政治的偶意を問題にするかぎりにおいては、この作品のもつ意味はかように表面的なものに止まらずさらに一層深いものといわねばならない。なぜなら、それは、ソビエト体制の例外的歪曲とされるスターリン主義にたいする批判に止まらず、ソビエトに体制の元祖かつ正統たるレーニン主義そのものにたいする批判を提出しているからである。つまり、この作品は、まさに上に述べきったようなレーニン主義の未来万能のメシア思想にたいする真向からの挑戦状を内包しているのだ。より具体的にいって、未来の進歩と幸福のために現在の生活を犠牲、破壊しようとする思想が、たとえ如何に痛ましいものであれいまま一瞬の生活を大切に生きた充足感をもって精一杯生きようとする哲学の表明によって、挑戦されているのである。ニーマイヤー教授が指摘するごとく、主人公イワン・デニーソヴィチ・シューホフには、出所の日を

《研究活動報告》

待ち侘びるが故に今日一日を無にするという気持は微塵もなかったのである。ソルジェニーツィンは、末尾につぎのように書いている。

「シューホフはすっかり満ちたりた気持で眠りに落ちた。きょう一日、彼はすごく幸運だった。…

一日が、すこしも憂うつなところのない、ほとんど幸せとさえいえる一日がすぎ去ったのだ。」(木村浩氏訳による)。

筆者自身は、このまことに興味深く示唆あるニーマイヤー教授の読み方を傾聴しつつ、ゆくりなくもソビエト文学の父と奉られているゴーリキイの『どん底』(1902)の一節をも憶いだしていた。貧困と重病に悩むアンナは、巡礼ルカーに「大丈夫！ あの世へ行けば、息がつけるさ！…もう少しのしんぼうだよ。」「(あの世では)…安息—あるのはそれだけだよ！」と慰められ、かえって生への執着と欲求を喚起されるのである。

「アンナ でも…ひよっとすると…あたし、よくなるかもしれないねえ？

ルカー (微笑をもらして) なんのためにな？また苦しい目に会うためにかい？

アンナ だって…まだ…もう少し…生きていたいもの…もう少し！あの世に苦しみが
ないとなったら……この世で、もう少ししんぼうしてもいいよ！」(神西清
氏訳による)。

(文責 木村 汎)

研究員会議における研究報告一覧

(1968年7月—1970年11月)

1968. 7. 百瀬 宏 フィンランド史における東方関係 ——研究動向の紹介——
 山本 敏 東欧経済史研究に関する一試論
 金子 幸彦 ピーサレフについて
 Donald W. TREADGOLD Marx and Russia
1968. 11. 五十嵐 清 資本主義法と社会主義法
 矢田 俊隆 第一次世界大戦とハプスブルク帝国
 阪東 宏 ポーランドにおけるスターリン「民族理論」の批判
1969. 7. 鳥山 成人 江口編『ロシア革命の研究』について
 高岡 健次郎 エス・エルに関する最近のソヴェト史学の研究について
 〈グーセフとエリツァンの著書に寄せて〉
 外川 継男 ハーバード大学におけるロシア革命50周年記念シンポジウムについて
1969. 11. 木村 彰一 1966年2月の文学裁判について
 衛藤 藩吉 ミュンヘンにおける東欧学会に出席して
 全 研 究 員 スラヴ研究のあり方をめぐる研究討議 (I)
 全 研 究 員 スラヴ研究のあり方をめぐる研究討議 (II)
1970. 7. 出 かず子 チェルヌィシエフスキーの「ランデ・ヴーにおけるロシア人」について
 Gerhart NIEMEYER Lenin and the Total Critique of Society
 福岡 星児 スラヴ中世文学の構造についての D. リハチョフの視点
 五十嵐 清 ドイツにおける Ostrecht 研究の発展と現状について
 江口 朴郎 「コミンテルンと東方」についての最近の研究動向について
1970. 11. 金子 幸彦 カラムジーンの小説
 沢田 于一郎 転換期にあるソ連経済
 全 研 究 員 スラブ研究のあり方をめぐる研究討議
 岩間 徹 デカブリストの自由思想
 木村 汎 ソ連の対東欧政策

The List of the Papers read on the Regular Conferences of the Slavic Institute

(July 1968–Nov. 1970)

- 1968, July MOMOSE Hiroshi, The Finnish Eastern Relations in Historical Resear-

- ches
- 1968, Nov. YAMAMOTO Satoshi, An Approach to the Economic History of Eastern Europe
- KANEKO Yukihiko, On Pisarev
- TREADGOLD D. W. Marx and Russia
- IGARASHI Kiyoshi, On the Comparative Analysis of the "Capitalist and Socialist" Laws
- YADA Toshitaka, The Habsburg Empire in the First World War
- BANDO Hiroshi, On the Polish Criticism of Stalin's Views of the National Questions
- 1969, July Group Discussion on the Slavic Studies
- TORIYAMA Shigeto, On the *Studies in Russian Revolution* ed. by Eguchi
- TAKAOKA Kenjiro, Recent Soviet Studies on the SRs
- TOGAWA Tsuguo, On the Symposium Held at Harvard University in Memory of the 50th Anniversary of the Russian Revolution
- 1969, Nov. KIMURA Shoichi, The Soviet Trial of Literature in February, 1966
- ETO Shinkichi, The Munich Congress of East European Studies in 1969
- Group Discussion on the Slavic Studies
- 1970, July IDE Kazuko On Chernyshevsky's "The Russian at the Rendez-vous"
- NIEMEYER, Gerhart Lenin and the Total Critique of Society
- FUKUOKA Seiji, The Viewpoint of D. Likhachev on the Structure of the Slavic Literature in the Middle Ages
- IGARASHI Kiyoshi, Eastern Law Research in Germany—Past and Present—
- EGUCHI Bokuro, On Recent Tendencies in the Studies on Comintern and the East
- 1970, Nov. KANEKO Yukihiko, The Novels of Karamzin
- SAWADA Uichiro, The Soviet Economy at the Crossroads
- Group Discussion on the Slavic Studies
- IWAMA Toru, The Liberal Thought of the Decembrists
- KIMURA Hiroshi, The Soviet Policy toward East European Countries